あがたの杜
http://www.agatajinjya.com
第22号 平成29年4月吉日
発行 あがた神社木の花会

大幣さん子供供奉（衣装と持物）について

縣神社 宮司 田 鍬 到 一

大幣神事は古代日本の貴族的、民俗的傾向の強い稀有の神事であります。平成二十四年には宇治市の指定無形民俗文化財に選定されました。今回はその中で子供に関する部分についてお話しします。

当日の巡行には猿田彦面、大幣、騎馬神人、七度半使等と共に、二番組大工町の大人（裃）の供奉者と子供達の供奉者で成り立っています。子供達の行事参加は、かつての「子供衆」の存在を示すものでもあります。

そして「大幣さん」の重要な歴史的要素である子供達の着衣の「着物」と威儀的である「持物」を今回取り上げてみました。

巡行供奉の子供着物

一、裃（かみしも）三人「翳（さしば）一対と杓鉾」

和服における男子正装の一種であって、肩衣と袴を共布（背と両乳、腰板の四カ所に紋を入れる）で作り、小袖の上から着る。

二、狩衣（かりぎぬ）三人柿色、白袴「下駄三組」

野外狩猟用に着用された簡便な装束であったが、一般公家の日常着として愛用されるようになり、時代を経るに従い公服となった。

三、直垂（ひたたれ）三人茶色「比礼矛一対、錫杖」

武士常装の装束であった。公家に用いる袍、狩衣の円領と異なり、庶民服より転じたもので垂領となっている。

巡行供奉の子供持物

一、比礼矛（ひれほこ）一対「直垂」

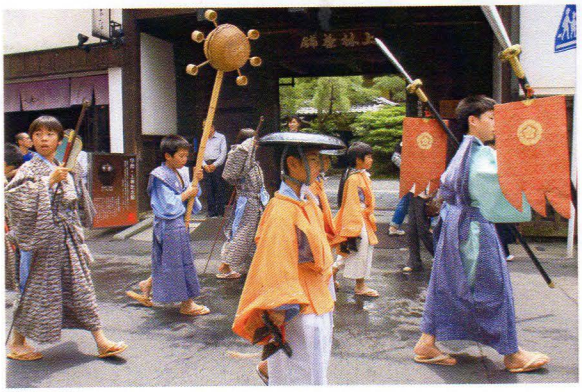
やや幅広で両刃の穂先をもつ長柄の武器で、祭礼の神輿渡御の先導を務め悪霊を鎮める祭具とされている。

二、下駄（げた）黒下駄に赤鼻緒三組「狩衣」

宇治市史（巻六）に、「黒塗りの下駄を童子に持たせて巡行するのが例となっているが、おそらくこれはこの鶴亀の舞人が使用したものであろうと思われる」としていますが、神社では社伝の俗解で、神事三柱の祭神の下駄持ち所役としております。

三、杓鉾（しゃくほこ）「袴」

鉾先には笊籠二つを合わせて、その間に七本の柄杓を放射状に刺している異形の杓鉾は、雨乞いの祭具とされている。



四、錫杖（しゃくじょう）「直垂」

先払いの鉄棒持ち。道士や僧の用いた杖であって、近世の警察組織で祭礼の警備にあたった下雑色の持物であったと思われます。また、神社ではこの鉄棒を「ジャリ」と言い伝えています。

五、翳（さしば）「狩衣」

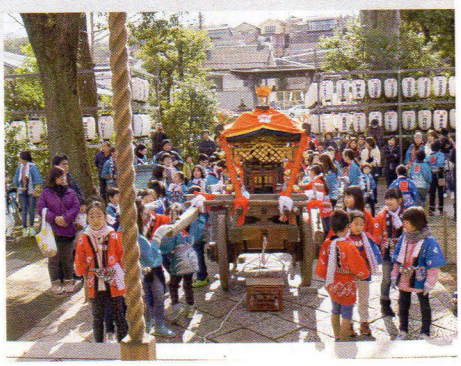
神社では「カザシ」と言い伝えていて、古代の宮廷での即位や朝賀などの儀式に用いられた威儀物です。柄を持って左右からさしかけ、貴人の顔を隠すための道具であったものです。

縣神社さんの子供みこし

熊谷栄子

縣神社さんの子供みこしのお手伝いに声をかけて頂き、ありがとうございました。
あちらでは子供たちを迎える為に法被などの準備や、炊き込みご飯におっきなお鍋に豚汁を作ったり。（とても美味しかったです）。

こちらではおみこしの組み立てが始まり力仕事に汗が光っていて、早くから活気がありました。そのうちに子供達の元気な声が増え、太鼓に獅子舞に、境内の賑わいにワクワクしました。お神輿の清祓でも出発でも子供達の笑顔が眩しかったです。玄関先や店先での応援に励まされ、駅前での休憩で元気を取り戻していく表情が何ともたまりません。道中では警察の方々の助けもあり無事に帰社。



少子化のこの時代に105人もの子供さんと地域の皆さんの溢れる笑顔が泉のように縣神社さんに湧いているようでした。神事行事が末永く続いて、縣神社さんも地域の方々も共に栄えて行くことを祈っています。

初あがたまつり

清水恭子

初あがたへの参加は、上の子供が参加させて頂いてから３年になります。子供も毎年楽しみにしています。

伝統ある行事に参加できること、地域の皆様のあたたかい御支援もあらためて感じることができました。

伝統ある「初あがたまつり」に、菟道小学校区の子供たちを毎年参加させて頂き、本当にありがとうございます。子供の人数が減っている中で、初あがたへの参加人数は毎年増えてきています。子供たちにとっても大切な行事の１つになっているんだなと感じました。

おみこしをひく子供達の笑顔や笑い声、一生懸命あるいている低学年の姿を見てほほえましく思えました。

貴重な経験を有難うございました。そして、この伝統ある「初あがたまつり」が、続きますようにお祈り申し上げます。

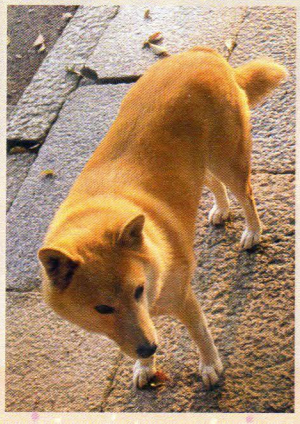
▲月刊「サヴィ」～大阪京都神戸で会える！モフモフ動物～2017年4月号（京阪神エルマガジン社発行）でも紹介されました。

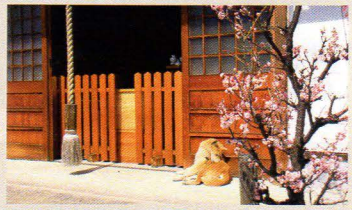
狛犬「ぺぺ」

昼下がり、大幣殿の前で日向ぼっこを楽しむ一匹の犬。今やＴＶに、新聞・雑誌にと数多くのメディアに取り上げられるほどの、県神社の人気者。その名は「ぺぺ」。柴犬との雑種（ミックス）で、今年 13 歳の雌（女性）。その人気は全国区である。

地元の方はもちろん、参拝者にも愛され親しまれる「ぺぺ」は、まず、吠えない。私も 13 年の間に１回、耳にしたくらいである。それも、優しく甘えたような声であった。ちょうど宮司もその時居合わせておられ、「よっぽどお腹が空いてるんですなあ」とおっしゃっていたのを思い出す。また、人を犬と思っているのか、それとも自分が人と思っているのか、誰にでも尻尾を振って近づく（番犬にはなりません、と宮司が苦笑する）。そんな仕草や愛らしい表情に，みんなが癒されるのである。最近ではこの“可愛い”に加え、もしかしたら当神社の御祭神「木花開耶姫命」の御使いか、とも思わせるほどの、威厳と風格を備えてきている。今や“ぺぺちゃん”は“ぺぺさま”と呼ばれるにふさわしい「狛犬」に成長した。人間の年齢でいえば、もう還暦を過ぎているかもしれない。どうか長生きしてもらって、この先も神社を見守ってほしい。そう願っています。

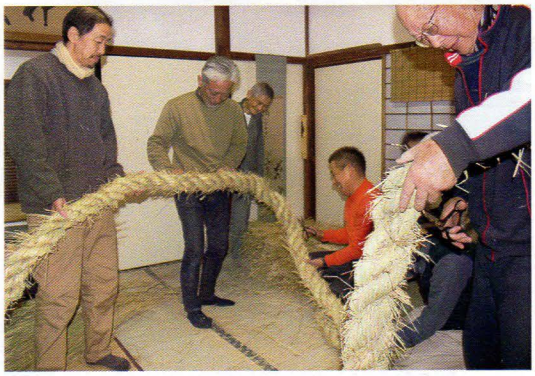
（木の花会　上田邦夫）





県神社の注連縄（しめなわ）作り

主宰　堀井義信



注連縄が何時の時代から飾られていたのか私にはわかりません。

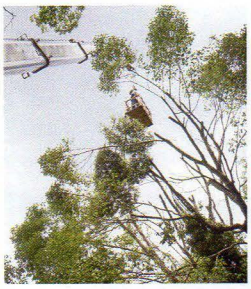
思えば二十歳を過ぎた頃、本家の伯父である堀井庄次郎氏から手伝って欲しいと頼まれてから65年。その当時は、松の木のほかに10本程の大樹があり、境内は“県の森”の様でした。

神楽殿の西南、椎の木の後方に高さ２メートルの八角形の木の囲いがあり、当初は、その注連縄（椋の木のものより長くて大きい）から作り始めたものです。また、県通りに大鳥居ができ、一度その注連縄を作った思い出があります。

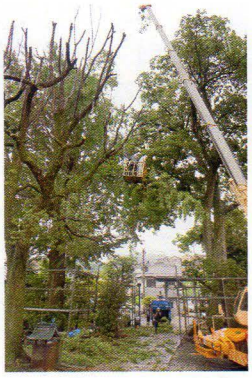
一本の注連縄は、主になる胴元がひとり、差し子ひとり、捩じり役ふたり、縄の揃え役ふたりの計６人がかりで作ります。注連縄のもとになる藁は、三軒の農家さんからいただき、シビ取りを施したのち、12月13日の「事始めの日」、夕方６時頃より総勢10数名で執り行い、現在は、７メートルにもおよぶ“椋の木”の注連縄をはじめ、各鳥居３か所、本殿、社務所、大幣殿など、７本を作り上げています。一旦作り始めると、黙々と約４時間、休むことなく作業が続きますが、完成後に本殿の鳥居にあげることで、参拝の方がその下を潜り、手を叩いて拝んでくださる“無の世界”にいざなう、大切な飾りだ、との思いで作っています。

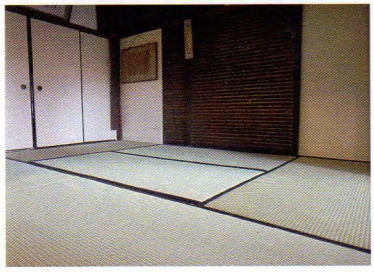
現在、人手が少なくなってきております。伝統あるこの行事を絶やさぬよう、伝承の側面からも是非ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

平成28年度　県神社事業報告

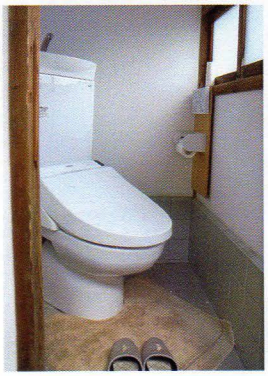


1. 本殿前の楠木２本の枝払

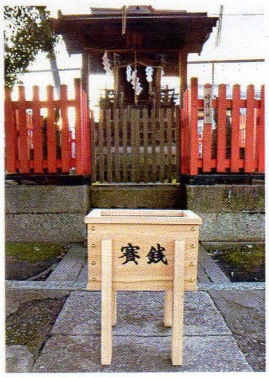




2. 社務所の畳替え



3. 下水切替工事



4. 稲荷社賽銭箱